社会福祉法人光風会通信　2023(R5) 年 2 月 28 日

陽 YOO 光 KOO 風 FOO

陽光

Vol.15
通巻 93 号

ユーザーとスタッフが共に過ごす年末年始

「ここは大晦日とお正月も仕事をするんだな。入所の施設でも病院でもないのに、盆正月休みなく開館してすごいな。」10 年前、光風会に就職して驚いたことの一つです。

サラリーマン＆兼業農家の 3 世代家族で田舎育ちの私。親たちが年末年始の休みに入ると、翌日から、餅つき、そば打ち、大掃除、お正月の買い出し、で大晦日を迎えます。正月三が日は親戚を行き来して、七草がゆでお屠蘇気分を抜き、鏡開き、小正月には地域の行事「どんど焼き」で近所の人たちと過ごし「一年が始まった」と実感する、この一連の流れが私の 20 年前までの年末年始の過ごし方でした。「家族と過ごすのが当たり前」なこととして。

その後、精神科の病院に就職した私は、自分の思う「当たり前」が当たり前ではなかったことに気づきました。病院や施設で何十年も年末年始を迎える患者さんに対し、「私は年末年始で実家に帰るのに、家族と一緒に年越しができないなんて気の毒だな。」と感じていました。ちょうどその頃、光風会に出会い「日本の血縁家族は限界。精神障害者を医療につなげることやその後の生活（くらし）すべてを家族に負わせてきた日本の福祉の現状がある。」という考え方にふれました。「え！そう？！何がおかしいのだろう。」とはじめはよく理解ができませんでした。家族は誰にとっても拠り所だろうとずっと思ってきていた「私」。光風会の主張の詳細をよくよく聞いてみると、非結婚、一人親、若年親、同性カップル、代理出産、養子など、様々な現代家族・家庭のあり方と課題に対応しうる、血縁家族に代わる新しい家族のかたちが必要なのだということでした。血縁家族を否定しているわけではなく、現状に合わせて家族に代わる・家族に近い仲間がいるとよいのだ、と腑に落ちました。

新年の会にユーザーから「家族のようにホッとする」と言葉をかけられたことがあります。その時に「家族に近い仲間の場とはこれか！」と実感しました。そして、大晦日とお正月を開館にするのは何も特別なことではない、必要があるからなのだと認識が変わりました。

年末年始の一連を家族のような仲間と過ごす。

節目節目を仲間と迎える。

その様子が紙面を通して伝わると幸いです。　　（「風（FOO）」施設長　河原井まゆみ）